

育てよう！原子力を支える 技術者・研究者

取締役
(電気事業連合会 専務理事)

伊藤 範久

Norihisa Ito
Director
(The Federation of Electric Power Companies of Japan
Senior Managing Director)

私がまだ子供の頃、絵本の中で、未来の家には一家に一台原子力発電機があり、家中の電気を作って快適な生活をしている風景を見た記憶があります。田舎に住んでいたからかも知れませんが、その頃は雷などでよく停電がありました。いったん停電したら1時間や2時間は当たり前でした。エアコンなんてありません、エコキュートもIHクッキングヒーターも当然ありません。夏は窓を開けて蚊帳の中で蚊取り線香をたいて寝ていましたし、冬には豆炭を入れたやぐらコタツや火鉢で暖をとっていました。風呂は薪で焚いていたし、ご飯はプロパンガスで炊いていたと思います。そんな時代の絵本の中に未来の家には原子力発電機が描かれていました。

現代は電気製品が本当に多くなりました。オール電化の家も普及してきています。電気がなければ家庭生活だけでなく、ビジネスも産業も成り立たない時代となっています。電気事業の責任はますます重くなってきています。地球温暖化への対応が叫ばれています。二酸化炭素を出さない太陽光発電を今の何十倍にしよう、風力発電をもっともっと導入しようとも言われています。原子力発電はどうなっているのでしょうか。日本には55基の原子力発電機(合計約5,000万kW)があり、一家に一台ではありませんが1世帯に約1kW相当の原子力が、電力の安定供給と二酸化炭素の排出抑制に大いに貢献しています。

私は現在電気事業連合会に出向しておりますが、原子力関係の仕事を多くしています。操業開始に向けて最後の試験が行われています六ヶ所再処理工場や、ベトナムの原子力発電導入に向けた協力に関わっています。そんな中で日々思いを強くしているのは、これからの日本、いや世界、地球にとって重要なものは、原



子力発電と原子燃料サイクルであるということです。原子力は安全確保が大前提ですが、原子力がなければエネルギーの安定供給と二酸化炭素の排出抑制は果たせないと思っています。

ではこれから何をすべきか、何が必要なのでしょうか。技術の開発・革新と高度な物造りの技術、そしてそれを支える人材の育成・確保だと思っています。日本はこれまでこれらを実現し、世界に評価され、経済大国になってきたと思います。2007年の新潟県にある柏崎刈羽原子力発電所は非常に大きな地震に襲われましたが、原子力の心臓部はほとんど無傷でした。設計と施工技術の賜物だと思っています。ベトナムの方のメイド・イン・ジャパンに対する信頼は厚いものがあります。来日のお土産に日本メーカーのデジタルカメラや電気製品を購入して帰る人が多いのですが、日本メーカーの製品でも日本で作った製品、本当にメイド・イン・ジャパンの製品を買い求められています。それだけ日本製品に対する信頼が厚いのです。

しかし今はどうなのか。理系に進む学生が少なくなってきていると聞きます。大学で原子力工学科の名前がほとんどなくなっている、電気工学科だって絶滅危惧種だと言われているとも聞きます。電気事業ばかりでなく、これからの日本の発展には一層の技術力の確保・向上が絶対に必要です。私は理系ではないので偉そうなことは言えませんが、これからの日本のため、世界や地球のために技術者や研究者の育成に可能な限り努力し、エネルギーの確保と地球環境を守る原子力を支えていく様々な分野の技術者・研究者が育ち、大きな夢を持ってはばたいていってくれることを切に願って止みません。